

# 多様な生活課題に応えうる家庭科の学び —日常生活における家庭科の学習効果についての調査を踏まえて—

星 野 洋 美

Investigation of the Learning Effects of Home Economics  
in Everyday Life

Hiromi HOSHINO

2014 年 11 月 20 日受理

## Abstract

Our research is focused on the students of one university and the home economics teachers of junior high schools. The first purpose of this study is to clarify the effects and problems of home economics lessons in elementary and secondary schools. The second purpose is to estimate the effectiveness of a new course of study for home economics.

The results are as follows:

- 1) Home economics learning activities are proved to be effective in citizenship education for solving multifarious problems.
- 2) The home economics lesson is insufficiency in junior high school.

In particular, we are short of lessons in 3th grade home economics.

We have to give conclusive evidence for revision of the new course of study for home economics.

## 1. はじめに

### (1)研究目的

子どもたちが将来にわたり日々の生活を送る上で、家庭科での学びを生かすことのできる場面は数多く存在する。家庭科の授業で学習する内容が、現代の様々な生活課題に応えうる内容となっているからである。

新学習指導要領は、現代の生活課題によりそった内容となっており、学ぶ内容がさらに充実している。しかし、生活課題に応えうる内容を学習し、体

験的活動を伴う授業を実施できる環境については、十分に整っているとは言えないと思われる。

本研究では、日常生活における様々な生活課題解決場面における家庭科の学びの成果（日常生活において役に立っていること）に関する調査をおこない、その結果をもとに、現状および課題（新学習指導要領における課題、未来を見据えた課題）について明らかにする。

## (2)研究概要（方法等）

昨年度実施した家庭科担当教員対象の家庭科の学習効果及び課題についての調査項目をもとに、「大学生対象の日常生活で役に立った家庭科の学習についての調査」の項目を立て、実施した。調査対象者は本学教育学部・外国語学部・造形学部3～4年生203名、調査期間は平成25年12月～平成26年2月である。

集計後に、生活場面毎の分類や、子どもの生活実態に基づいた生活問題の解決能力育成の4つの視点による分類をおこない、家庭科での学びが生かされる事象について分析していく。また、現代の様々な生活課題に応えうる内容や、将来において役立つと予想される内容についても考察をおこなう。

（学習効果及び課題の記述式調査の結果等は、年報や学会例会にて報告済である。）

## 2. 研究結果

### (1)日常生活で役立っている家庭科の学習内容の生活場面による分類

日常生活で役に立った家庭科の学習（小一中）についての調査結果から、家庭科での学びが生かされる生活場面別に内容を分類整理したところ、日常生活において家庭科での学びを生かすことのできる場面は数多く存在することや、家庭科の学習内容が、現代の様々な生活課題に応えうる内容となっていることが明らかとなった。

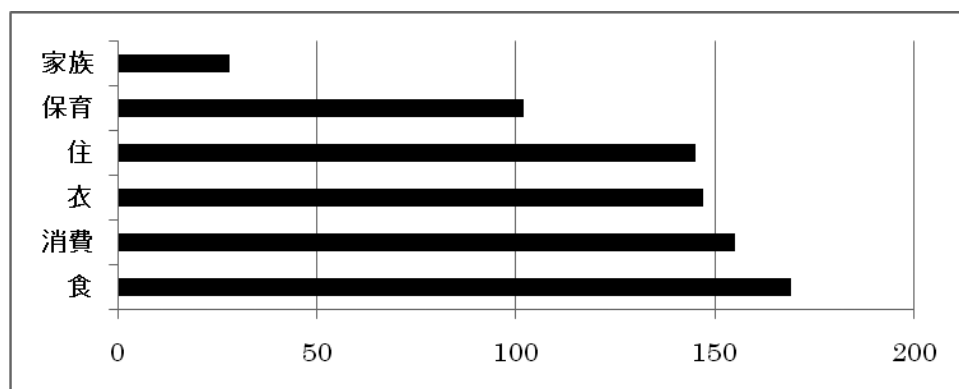
結果の詳細については、次の①～⑧の記述およびグラフ（①のグラフは全体の回答結果、②～⑧は生活場面毎の回答結果）にて示した。

①全体：食場面の回答数が最も多い（169/203）が、消費・衣・住・保育も100以上の回答がある。家族についての回答数が少ない理由については、人とかかわる術という既成概念があるからではないかと推測することができる。この場面での学習内容を改めて見直す必要性を感じた。

表① 全体：6つの生活場面による分類

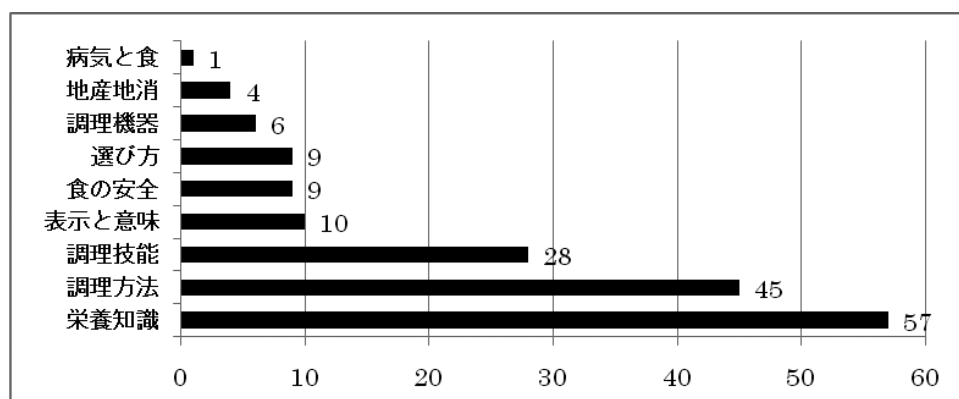
回答者	回答数	食	消費	衣	住	保育	家族
全体 203	746(100)	169(22.6)	155(20.8)	147(19.7)	145(19.4)	102(13.7)	28(3.8)
男 92	324(100)	87(26.9)	66(20.4)	59(18.2)	63(19.4)	34(10.5)	15(4.6)
女 101	422(100)	82(19.4)	89(21.1)	88(20.9)	82(19.4)	68(16.1)	13(3.1)

図① 全体：6つの生活場面ごとの割合



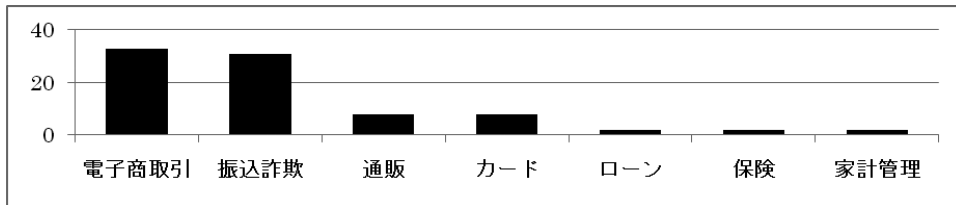
②食生活：図②のグラフでは、回答内容は栄養に関する知識が最も多く、次いで調理方法、調理技術の順となっている。栄養に関する知識が飛びぬけて多いことや、技能や経験知が少ないことから、知識偏重の傾向がみられる。

図②：日常生活で役立っている「食生活」の学習内容の詳細



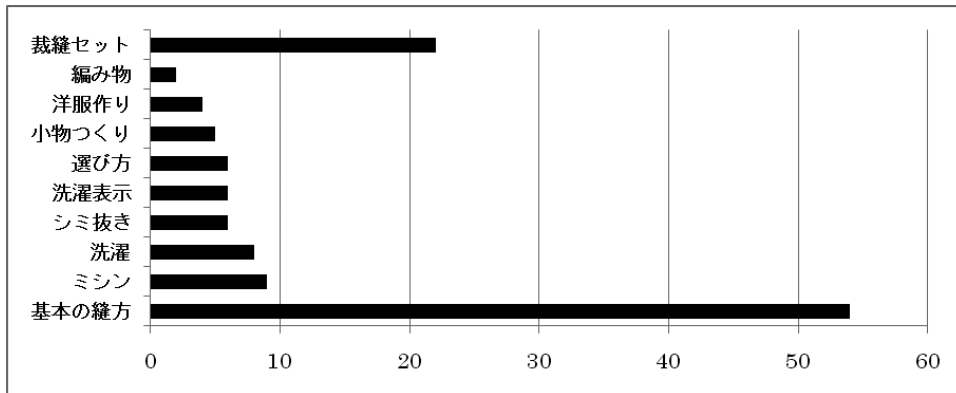
③消費生活：電子商取引や振込め詐欺等への対処についての記載が約9割となっている。振込め詐欺が巧妙化し被害者が後を絶たない上に、インターネットでの物品購入が一般化する昨今、これらの対処について学ぶことは、とても重要であると思われる。

図③：日常生活で役立っている「消費生活」の学習内容の詳細



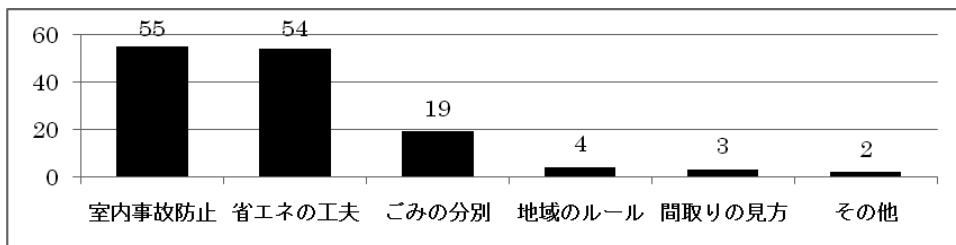
④衣生活：基本的な縫製技術、ミシンの使い方、そして洗濯やシミ抜きが記されていた。役に立った学習とは言えないが、裁縫セットを今でも持っていて役に立っているといった記載が22件程あった。

図④：日常生活で役立っている「衣生活」の学習内容の詳細



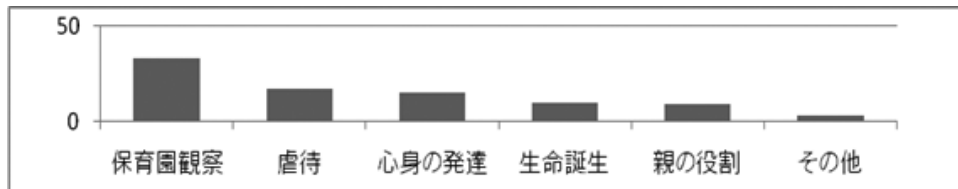
⑤住生活：幼児や高齢者の室内の事故防止、グリーンカーテンなど省エネの工夫といった、家族や環境に関わった内容が多く、役立ち度の評価がとても高かった。

図⑤：日常生活で役立っている「住居」の学習内容の詳細



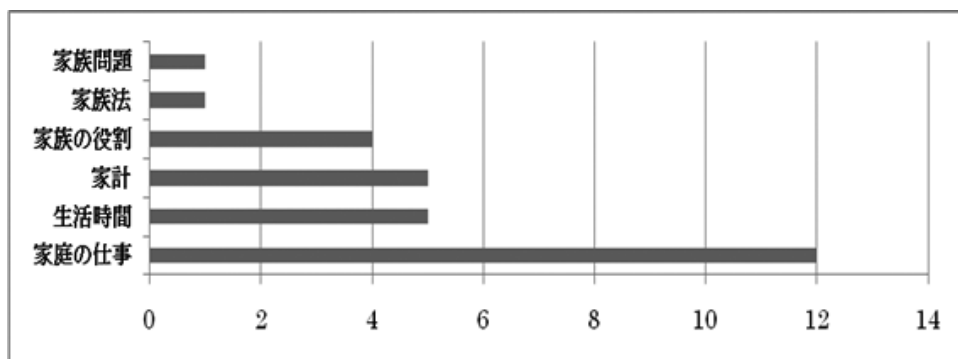
⑥保育：保育園での観察実習から幼児への接し方を学べたこと、虐待についての調べ学習をから子育ての重要性と大変さを知ったことが将来役立つといった記述があった。体験することや、主体的に追究することなどが伴うことで、関心度や役立ち度が高まることがわかった。

図⑥：日常生活で役立っている「保育」の学習内容の詳細



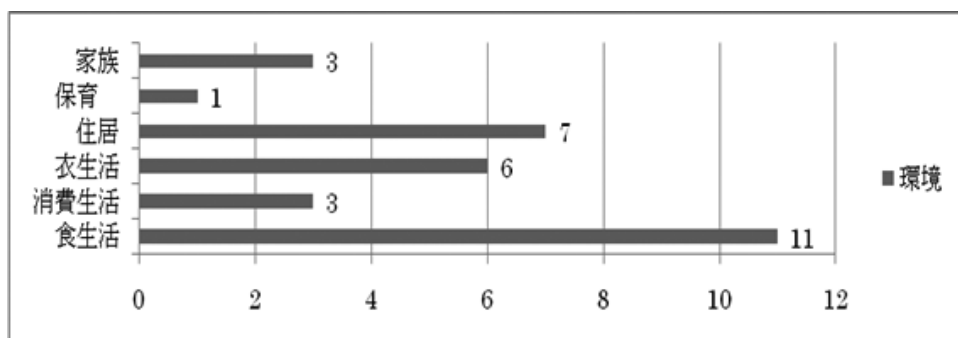
⑦家族：家庭内労働についての記述が多く、その背景として女性の社会進出に伴い家庭内労働のシェア意識が高まっていることが推察できる。

図⑦：日常生活で役立っている「家族」の学習内容の詳細



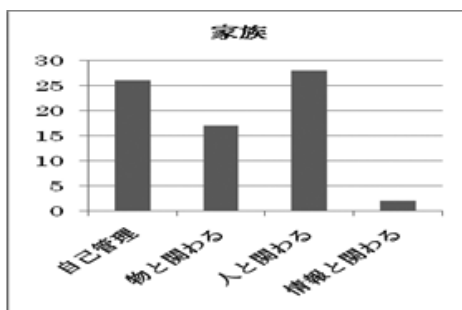
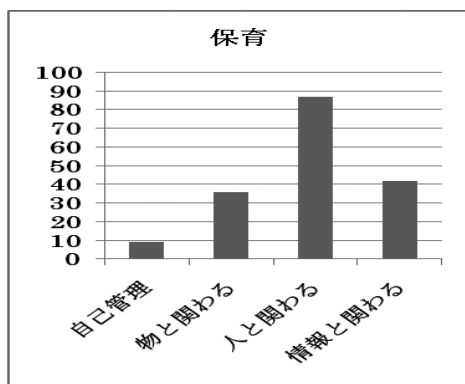
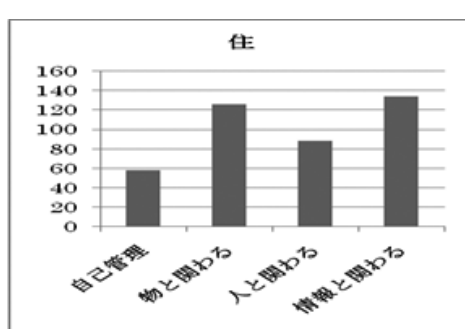
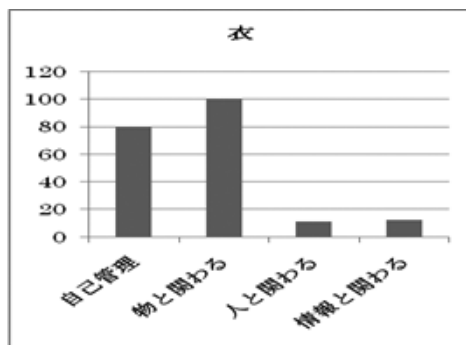
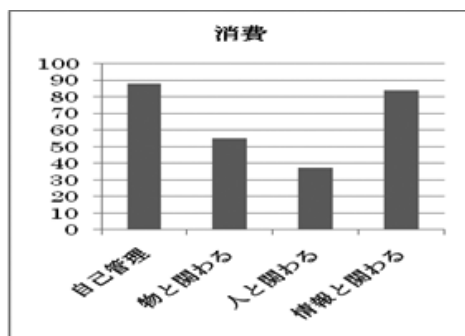
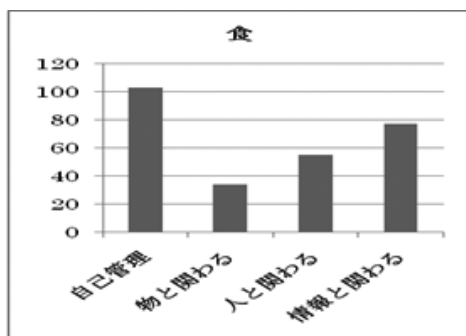
⑧環境：他の6場面の回答に見られる環境に関することを、環境ということで集めて分類をおこなった。また、重複する項目であることから、全体の集計に入れずに、集計結果を記した。どの場面でも環境に関する記述があったが、食場面での記述が最も多かった。食に関する記述回答では、「安全」「健康」、他の場面では特に「省エネ」「安全」「もったいない」といったキーワードが見られた。

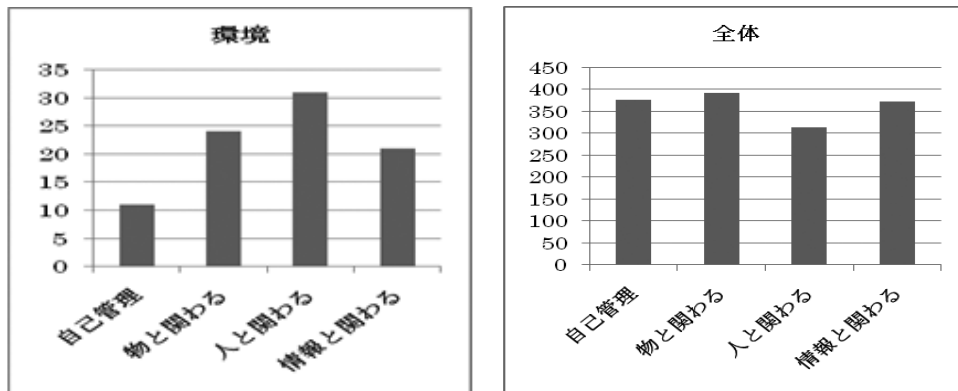
図⑧：日常生活で役立っている「環境」の学習内容の詳細



## (2)子どもの生活実態に基づいた生活問題の解決能力育成の4つの視点による分類

子どもの生活実態に基づいた生活問題の解決能力育成の4つの視点とは、「生活の自己管理能力」、「物と関わる能力」、「人と関わる能力」、「情報と関わる能力」である。生活場面ごとの分類結果については、以下の①～⑦のグラフに示した。





### (3)役に立っている理由（特筆すべき事項のみ記載）

#### ①食生活場面：

##### a) 調理方法についてのコメント

母親が外国人で、母国の料理が中心である我が家だったが、学校で普段日本人が食べているご飯・味噌汁や焼き魚やハンバーグなどの作り方を学んだので、家族につくってあげるようになった。母にも教えることができた。今は自炊で、役に立っている。

##### b) 食の安全についてのコメント

中国から輸入している食品の安全管理のずさんさにびっくりした。中国人の友が小中学校では家庭科の授業がないといていた。食の安全やモラルについて学ぶ授業がないから、食品管理がおろそかになる事件がおこるのかもしれないと感じた。

#### ②消費生活：振り込め詐欺

あやしい電話や訪問販売とか、とにかく疑わしい人や情報に警戒するようになった。日本語がよく理解できないことで、あいまいな返事をして困ることがよくある親や祖母にも学んだことを伝えて、家族みんなで注意するようにした。

#### ③衣生活：裁縫セット

小学校5年生から家庭科が始まるということで裁縫道具と箱を買った。その裁縫セットを家から離れてアパート暮らしをするときに持ってきて、ボタンつけなどに使っている。

小学校の時に買った裁縫セットが、今やお母さんのものとなって家で活躍している。

#### ④住居：幼児や高齢者の室内事故

曾祖母がいるので建築上はバリアフリーにしたが、絨毯やコードにつまずくことを知り、家で気をつけるようにした。

地震に備えて、いつもお風呂のお湯は抜かないで溜めておくようにしていたが、姉の5才と2才の子供が来た時は、かならず抜くようになった。子供の事故のことを知って家族で話し合ったりするようになった。

⑤保育：

a) 保育園での観察や交流

小さな子に接したことがなかったからビクビクだったけど、意外とうまく遊べてうれしくて子どもが好きになって、今こうして教師を目指している。

b) 虐待について

授業で虐待の実態を調べて発表した。インターネットだけでなく、児童相談所や子ども電話相談などの人に話を聞いたりしたので、とても勉強になった。「他人事ではない」という言葉が、親になる日が近づいた今も頭に残っている。

⑥家族：家族の役割など

下宿して1週間で親のありがたみを感じた。また、親に頼りすぎていた自分に気づいた。反省するとともに、家庭科で学んだ家族の役割について改めて考えたい。

中学生の時に、週末は家族と過ごすのが普通と思っていたら、日本の子は友達と遊んだり、部活動をやるのが普通だと知り驚いた。日本とブラジルでは家族関係が違うと思ったが、授業で学習して家族によって様々だということがわかった。皆仲良く協力し合っている自分の家族に自信を持った。

中学1年生のはじめの頃の家庭科の授業で、多様な家族があることを肯定してくれたことで、父子家庭であることの違和感が払拭された。

(4)将来役に立つと予想される学習内容

- ①食生活で学ぶことは生涯すべてにわたって有効。
- ②振り込め詐欺だけでなく架空請求やオリンピック詐欺など様々な手口が横行しているので、消費生活における学習はより必要となってくる。
- ③選び方や洗濯や保管方法など、これから必要になる。  
景気が良い時や、安い衣類が手に入る時は、買えば良い。でも、景気が悪くなったりして衣類が簡単に手に入らなくなったら、修理することや家庭で作ることが必須となり、裁縫ができないと困る。
- ④家を買うことになった時、リフォームしなければならない時に、必要な知識を学んでおきたい。
- ⑤保育での学習は、自分たちが子どもを産み育てる時期に絶対に必要である。  
また、教員や保育士になった際にも必要である。
- ⑥結婚して家庭を持った際に、家計（消費生活）・子育て（保育）のことなど



役に立つ。

### 3. 課題

#### (1)「日常生活で役立っている家庭科の学習内容の生活場面別分類整理データ」からの課題

生活課題に応える内容の学習や体験的活動を伴う授業の実践は、現在のように入業時間等の環境が整わない状況下では十分に行えない。それ故、理想的カリキュラムや制度的カリキュラムを全て網羅するのは難しい状況であり、必要度が高いものを精選した教員の認知カリキュラムを優先させ、実際的なカリキュラムと経験的なカリキュラムへと移行していくことが求められている。教員はカリキュラムが通るフィルターとなる存在であり、家庭科での学習内容が生活課題に応える内容となるか否かは、過酷な環境下での教師の裁量に任されていることになる。時間数の問題解決等、早急な環境改善を要望する。

#### (2)「学習内容が役立っている理由」「将来役立つと予想される学習内容」からの課題

1) 食生活において最も役に立つことは「栄養の知識」と答えている人が最も多かった。小学校で学ぶ5大栄養素とその主な働き、そしてそれぞれの栄養素が比較的多く含まれている食品に関する内容は、とても十分とは言い難い。中学校では食品群がでてきたりしてさらにくわしくなってくるがまだまだ十分な内容とは言えない。高校になると一気に栄養素の種類が増えて、生物や化学で学ぶ内容と重なってくる部分が多分に見られ、格段に難しくなるようだ。

大学生から、食育が大切とされている今、小学校低学年から学習することができれば、もっときちんと栄養の知識が身につくはずである。食事バランスガイドをきちんと理解して実践していくための基礎知識を高学年になる前に身につけることができた方が良いのではないかといった意見もあった。

昨年度実施した家庭科担当教員対象の家庭科の学習効果及び課題についての調査協力者である中学校教員 Y に聞いたところ、「中学校においては、生涯健康を維持していくため、さらに成長とダイエットの狭間で間違った食概念を持たないため、栄養素の種類と働き（消化吸収や体内での働きなど）や食情報をきちんと学ぶことが大事である。しかし、家庭科の学習内容にみあう時間が確保されないため、このような必要な学びが十分に行えない状況となっている。」といった意見が出された。

2) 多文化共生が進み、家族の形態や生活スタイルの多様化そしてグローバル化に拍車がかかっている状況の中、家庭科の学習内容はこのままで良いのだろうか。

家庭科教育において、多文化共生やグローバル化に伴う家族の形態や生活スタイルの多様化を扱う重要性は以前より指摘されてきている。その例として、日本家庭科教育学会の『家庭科の21世紀プラン』において、(池崎, 2000)は、「外国とのかかわりに関心を持たせたり、グローバルな視座に立って指導していくことは、今後の家庭科教育の方向性を示すことになる」(p.57)と提言し、「世界で共存する一市民、一国家として生活問題を自ら判断し、処理する問題解決能力」(p.56)の重要性について言及している。また、「衣食住等をはじめ生活設計に関わる学習がアイデンティティの育成や異文化理解に繋がることから、多文化共生における家庭科の役割は大きい」(星野, 2010, p.185)と本論者も以前より指摘し、教材開発に努めている。

3) 日本では、輸入食品が国内自給食品を上回り、技術開発が進み、季節に関係なく様々な野菜・果物そして多様な食品が容易に手に入られる。また、安価な上に調理に手間暇がかからない冷凍やレトルト食品が大量に消費されている。地産地消が良いことは頭ではわかっているが、実際は安くて簡単に調理出来ておいしいものを購入してしまう人が多い。地産地消を進めるためには、自分の住む地域について愛着を持つことや地元で採れる食材の調理方法などきちんと学ぶ必要があるのではないだろうか。

4) 自然災害や事故から身を守る術や、いざ何かかも失ってしまったときに生きていく術は、どこでどのように学ぶべきだろうか。

これらの課題を解決する学習をおこなうことができるのが家庭科であると考え、日本家政学会では、東日本大震災を経験して、災害時にすこしでも健康で文化的な生活を送ることができるような方策についてまとめ、衣食住、コミュニケーションと情報、子どもや高齢者といった項目を網羅した「家政学からの提言 震災にそなえて」の冊子を2012年に作成した。この冊子は小中学校の家庭科の副読本として活用できる内容となっている。

5) 親の育児放棄や虐待をはじめ未成年者による犯罪やいじめなど子どもたちをめぐる様々な状況がクローズアップされているいま、子どもを産み育てる意味について考えたり子育てに必要な学びを提供することができる家庭科を重要視していこうという動きがあってもよいと思われる。

#### 4. おわりに

##### (1)多様な生活課題に対応した学習内容

周知の通り、現代社会では、地球規模での環境問題の加速化、人や物そして情報のグローバル化やボーダレス化、先進国での少子高齢化と開発途上国での人口の爆発的増加、新興国の台頭や様々な利権争いによる国際間の緊張、国内においては内なる国際化や多文化共生社会への対応、消費税アップをはじめと

した経済政策に翻弄される消費者の生活変化など、めまぐるしい社会変化とともに、解決困難な課題が山積している状況である。これらの諸課題解決に求められるのは、知識や技能を活用して多様な問題に取り組み解決する力である。社会の諸課題に対応できる子どもを育成するため、コンピテンシー<sup>(注1)</sup>に基づく教育改革を推進することが、今日の世界的な潮流となっている。(国立教育政策研究所、2013)

日本でも、国立教育政策研究所において、社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程の編成に関する研究が進められ、「21世紀型能力」<sup>(注2)</sup>の枠組みの試案が示された。文部科学省においても「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」が2014年3月31日に「論点整理」を公表しており、次の学習指導要領の改訂は、この能力論を中心に編成されることが見込まれている状況である。このような状況を受け、児童・生徒に育成すべき資質・能力とは何か、各教科ではどのような目標や内容を扱うのか、児童・生徒の資質・能力の育成状況をどのように把握するのか、また学習評価はどうあるべきかなど、その具体的な方向性を示すことが求められている。(国立教育政策研究所(勝野代表)、2014)

既に、家庭科の学びの中学生の習得状況については、「特定の課題に関する調査(技術・家庭)」(国立教育政策研究所教育課程研究センター 平成21年3月)に示されている。この報告では、技術・家庭における基礎・基本となる知識、生活で活用する力の定着および理解の状況、また実技調査を通して技術・家庭における基礎・基本となる技能の習得状況について記されている。これまで、本論者は、この報告書をもとに、家庭科を通して習得できる能力、現在及び未来の日常生活で家庭科での学びがどう生かされるのか、思考を重ねてきた。

上記の21世紀型能力や、育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会での論点整理を見た限り、実生活における家庭科の学習の必要性を明らかにする研究は、今後さらに重要になってくることは必至であると思われる。そこで、次の研究ステップでは、現在の研究の課題を受け、生活の多様性に注目して、現代社会において生活を営む上で必要とされる「家庭科で育成されるべき能力」、そしてその「定着度」、「能力を育むための授業」について、調査研究をおこなっていきたいと考えている。

「能力を育むための授業」についての研究は既に着手しており、3の(2)2)の多文化共生について例を挙げると、家庭科教育において多文化共生を扱う重要性は以前より指摘されてきたものの、研究途上段階と思われる。

これまで本論者は、衣食住の学習がアイデンティティの育成や異文化理解に繋がることから、多文化共生における家庭科の役割は非常に大きいことは明らかであることを、指摘してきた。(星野、2010) また、「外国とのかかわりに関

心を持たせたり、グローバルな視座に立って指導していくことは、今後の家庭科教育の方向性を示すことになる」ことや、「世界で共存する一市民、一国家として生活問題を自ら判断し、処理する問題解決能力」（池崎, 2000）が大切であることを、先述の日本家庭科教育学会発行の『家庭科の21世紀プラン』において指摘してきている。しかしながら、時間数など物理的理由や教員の意識の問題もあり、授業内容としてそこまで持っていくことは難しい状況となっているようである。

## (2)課題解決のための試み

－課題3(2)1)の解決に向けた実践例：栄養素についての理解を深める学習－

### ①対象：大学2年生

### ②本時の目標

- ・地域にゆかりのある先人「鈴木梅太郎」の発見したビタミンB1の働きについて理解し、わかりやすく説明ができる。
- ・体の成長が盛んで活動が活発な時期である若者が、栄養素を十分に摂取しなければならない理由について考え、日常生活で栄養的に過不足のない食事をとる必要があることを理解することができる。

### ③実践概要および結果

#### ・実践概要

#### 第1時)

概要：ビタミンの働きについて、文献やインターネットによる調べ学習を行い、調べてわかったことを個々で整理する。

結果：ビタミンの働きについて、文献やインターネットによる調べ学習を行い、調べてわかったことを整理していく作業は有効であるが、本当にビタミンの働きがわかっているかどうかは疑わしかった。試験結果にばらつきがあったからである。

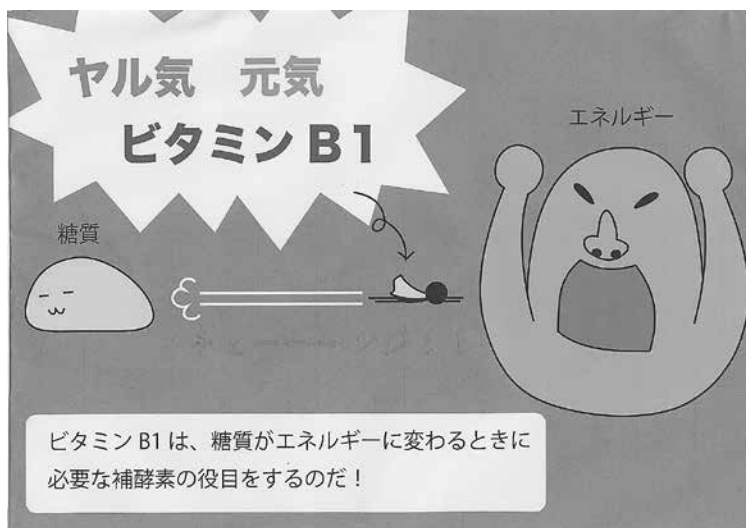
#### 第2時)

概要：前回の結果を受け、次に図で表して説明する作業を学習活動に取り入れた。

結果：学習者が、徹底的に分かるまで文献を読むことや、教師に質問するということを経て、きちんと理解し、図で表すことが可能となった。図の例については以下に示した。(A図及びB図)

# ビタミンB1を表現したイラスト 1

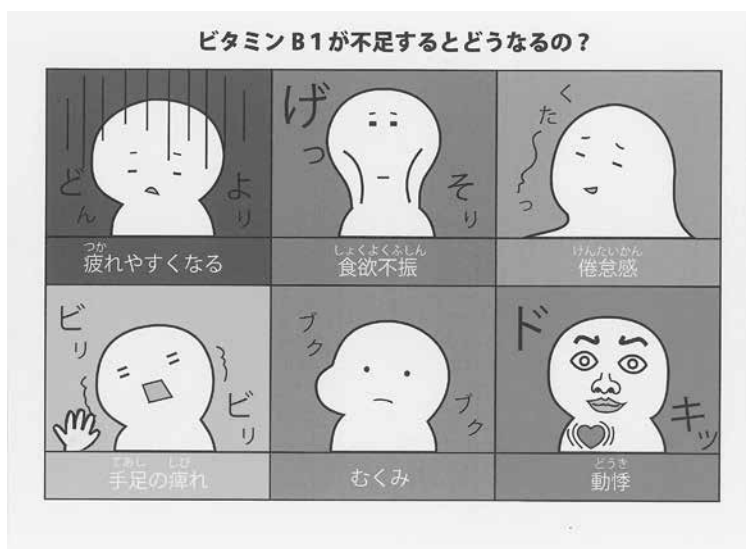
A図 ビタミンB1の働き～糖質がエネルギーにかわる時に必要な補酵素～



※図の補足説明：補酵素：酵素の働きを助ける重要なもの。糖質をエネルギーにかえるには、酵素・補酵素が必要になる。酵素と補酵素が協力しなければ「糖質をエネルギーにかえる」という仕事ができない。…つまり、米飯やパンなどを沢山食べても、ビタミンB1が不足していると、エネルギーがちゃんとつくられず、心身が不調になってしまう。

# ビタミンB1を表現したイラスト 2

B図 ビタミンB1欠乏症状



(A・B図製作協力者：望月飛鳥)

## 参考文献

1. 国立教育政策研究所 2013「21 世紀型能力」教育課程の編成に関する基礎的研究報告書 5  
『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』 pp.26-30
2. 国立教育政策研究所（基礎研究部：後藤顕一、初等中等教育研究部：松尾知明  
初等中等教育研究部：白水始）2013「教育課程の編成に関する基礎的研究」  
『国立教育政策研究所プロジェクト研究（平成 21 ～ 25 年度）』 発表資料
3. 国立教育政策研究所教育課程研究センター長 勝野頼彦（代表）2014  
「資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理」  
『教育課程の編成に関する基礎研究報告書 7』
4. 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2009  
「特定の課題に関する調査（技術・家庭）」
5. 星野洋美 2010 「多文化共生社会」  
吉原崇恵編『子どもが生きる家庭科』開隆堂、2010、pp.185
6. 池崎喜美恵 2000「国際化と家庭科教育」  
日本家庭科教育学会編『家庭科の 21 世紀プラン』、2000、pp.54-57

## 注釈

注 1) OECD における「キー・コンピテンシー」に基づき、コンピテンシーの概念を「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができる力」としている。（文部科学省）

また、「キー・コンピテンシー」の定義は以下のようにになっている。

・「キー・コンピテンシー」とは、日常生活のあらゆる場面で必要なコンピテンシーをすべて列挙するのではなく、コンピテンシーの中で、特に、①人生の成功や社会の発展にとって有益、②さまざまな文脈の中でも重要な要求（課題）に対応するために必要、③特定の専門家ではなくすべての個人にとって重要、といった性質を持つとして選択されたもの。

・個人の能力開発に十分な投資を行うことが社会経済の持続可能な発展と世界的な生活水準の向上にとって唯一の戦略。

（文部科学省『OECD における「キー・コンピテンシー」について』より）

注 2) 21 世紀型能力：「生きる力」としての知・徳・体を構成する資質・能力から、教科・領域横断的に学習することが求められる能力を資質・能力として抽出し、これまで日本の学校教育が培ってきた資質・能力を踏まえつつ、それらを「基礎」「思考」「実践」の観点で再構成した日本型資質・能力の枠組みである。

（参考文献 1 <国立教育政策研究 2013「21 世紀型能力」>より）